

# 旧約聖書『ルツ記』と漫画『ONE PIECE』

## — 芸術観光学の理論と実践⑤ —

平居 謙

### 要 旨

社会現象ともなっている人気漫画『ONE PIECE』の登場人物の名前には、北欧神話や仏教、キリスト教などさまざまな宗教・物語の名称が用いられている。特に聖書からの転用は数が多い。のみならず、物語構造そのものをパロディの手法を用いて独自の世界観を生み出している。本稿では『旧新約聖書』との関係、特に『旧約聖書』の『ルツ記』との関わりに注目してその関係性を明らかにする。その中で、未完の大作『ONE PIECE』の主題と表現の特徴を明らかにする。

### はじめに

筆者は2007年より「芸術観光学」という新しい「観光学」の領域を摸索し、その方法および実践<sup>1)</sup>を発表してきた。「芸術観光学」における重要な「MAPL」(後述)のうち、「Move」(移動)および「Love」、そして「Action」(演出)については既に発表済みである。本稿においては、残された「Parody」について見ておきたい。具体的には現在「社会現象」といえるほどにまでその人気ぶりが注目されている漫画『ONE PIECE』<sup>2)</sup>の『旧新約聖書』との関係、特に『旧約聖書』の『ルツ記』との関わりに注目してその関係性を明らかにする。

『ONE PIECE』という漫画を研究対象とする理由は、一つにはそれが上述のように超人気作品であるということがある。「観光」は今や選ばれた特別な人々のものではなく、多くの人々に開かれたものとなっている。したがって、観光を知るには「時代の精神」「流行の先端」を知っておくことが必要不可欠なことなのである。同時に、『ONE PIECE』の性質そのものにも「芸術観光学」の対象となり得る根拠が存在する。『ONE PIECE』は主人公が「ワンピース」という大秘宝を捜し航海を続ける物語で、行く先々で異文化と衝突し、その中で心を許せる仲間と出会ってゆくというまさに「観光」そのものの物語であるというのがそれである。

『ONE PIECE』は未完の超大作であり、今後長く連載が継続すると予想される。本稿は、その地の歴史を知悉することが観光の魅力を倍増させることと同様、『ONE PIECE』を典拠する作品を熟知することで物語受容の基準線を仮設することを一つの目標におく。

### 第1節 芸術観光学における「MAPL」

本節では「芸術観光学」の骨子をまず確認しておきたい。「芸術観光学」は、「芸術」と「観光」の本質を突き詰める「学」であり、「芸術作品」及び「芸術作品に関連する形で形作られた観光地・観光現象」<sup>3)</sup>を分析・考察対象とする。研究方法としては「芸術作品」の中に「観光的構造」を見出し、それに着目しながら分析・考察する。また対象作品を観光資源として用いた「観光現象」をも「二次創作物」と看做し、分析・考察する。さらには「観光現象」と「芸術作品」を比較分析する場合もある。

ここにいうところの「芸術作品」とは、文学・映画・漫画・アニメーション等の作品一般を指し示す。具体的には、物語構造を分析する上で、「芸術観光学のMAPL」すなわち Movement (移動)・Attraction (演出)・Parody (パロディ)・Love (ラヴ)等を最重要項目として扱う。さらに、今後

有効な視点の開発に努める。観光現場においても、対象作品に関するある一定水準の理解がなければ、観光資源として「利用」することすら皮相的な形に留まる。このような場合には利潤追求が先行し、「観光提供」が文化的行為に発展する可能性は極めて薄い。

その他、対象作品の有する内容に即して個別的な主題を考察する必要がある。一般的には論文・エッセイ等でその成果は発表されるが、一般書・観光ガイド・創作・演劇・映画・楽曲・舞踊等の様々な形を取ることも可能である。以下、これらの重要性に関して略述する。

#### ① Movement (移動)

観光に行くためにはどんな短い距離でも<移動>する。作品の中 — それが映画であろうと小説であろうと漫画であろうと — では、主人公たちも必ず<移動>する。日本の近代文学のように、書齋の中に閉じこもって気温の変化や部屋の中にいる虫の動きばかり気にしているような小説であっても必ず視線は動く。人が存在している以上、ひとところに留まっていることはできない。必然的にそこに物語が生まれてくる。

#### ② Attraction (演出)

演出について考えてゆくことは、観光提供側や作者の製作意図を読むということである。長い長い詩が、実は「I love you.」ということしか言っていないことを読み取って「下らない」と断ずればそれで終わるが、その表現の面白みをじっくりと鑑賞し楽しむことこそが、芸術を楽しむ態度の基本だといえる。これがすなわち「芸術観光」であり、それは「演出」について考察することによって、より具体的な段階に入り込むことが可能である。

#### ③ Parody (パロディ)

パロディという言い方を「観光」に関わって用いるのは、少々奇異に響くかも知れない。しかし、観光行動の本質について考えてみるならば、それがパロディという言葉と非常に意味が近いことに気づく。観光においてはある地方から別の地方に移動する。しかし引っ越すわけでも移民するわけでもなく「必ず戻ってくる」ことを前提に「一定期間」試してみるに過ぎない。異文化接触ではあるけれども衝突やそれによる苦悩とは距離を保つことが可能な範囲でのそれに過ぎない。そういう意味で観光は「中途半端」な「引越し」である。また、近年その度合いはますます強まっているが、あらゆる情報を手に入れた上で多くの人々は観光地へと向う。ガイドブック等に載っている楽しみ方を真似するのだ。この点において、芸術における模倣と非常に近接関係にある。模倣のないところに表現はない。しかし模倣で終わることを実は誰よりも嫌がっている。あらゆる表現者はそうだ。観光者の中にも実はそういう人たちは意外なほどに多いものである。研究・批評の立場から言っても、過去の作品と比較検討しながら考察を加えてゆくことは極めて楽しい方法である。本稿はこの第3番目の項目「パロディ」に関する考察である。

#### ④ Love (ラヴ)

最後のL (ラヴ) は様々な領域に広がってゆく。狭義のそれを考えるだけでも、婚前旅行・新婚旅行・フルムーン旅行。あるいは親孝行な子供たちから両親へのプレゼント旅行。家族旅行。また、「愛」という言葉はあまり思い浮かべないが修学旅行や研修旅行も、生徒や学生たち相互の「友情」を育てるためには特別に優れたプログラムになりえる。もっと広義にとらえれば、見知らぬ地域への関心・自然への目の開花・文化への感心の発露、ひいては人間存在そのものへの深い思い。そのようなものを生じさせる契機と観光はなりえるし、芸術作品は何らかの形で「愛」を主題にしていることが通常である。

このような意味から「芸術観光学のMAPL」=「Movement 移動」「Attraction 演出」「Parody パロディ」「Love ラヴ」への分析が最優先されるのである。加えて、対象となる作品によって個別の主題が展開されるわけであるから、「芸術観光学のMAPL」要素の抽出で研究が完了したと考える

誤謬を避けなければならない。対象の本質を明らかにするためには、「芸術観光学の MAPL」が重要であると同時に、個別的な課題も同様に重要である。それは、ある観光地に対して地域の独自性や持続性等といったどの観光地にも共通の課題がある一方で、当該観光地に特有の問題が存在するということと平行な関係である。

## 第2節 『聖書』と『ONE PIECE』を比較することの妥当性

拙著『ワンピースに学ぶ仕事術』<sup>4)</sup>の中で『ONE PIECE』が旧約聖書の「ルツ記」に依拠している可能性について指摘した。後に内田樹は『ONE PIECE STRONG WORDS』下巻<sup>5)</sup>の中で<(ワンピースは) 21世紀の日本が生み出した一種の「聖書のようなもの」>だと述べている。これによって「ワンピースと聖書」の関係が注目され、インターネット上でも話題になっている。本稿では『ワンピースに学ぶ仕事術』において、その性質上詳細に検討することのできなかった『ONE PIECE』と聖書について考察を行う。ここではまず、『聖書』と『ONE PIECE』比較の妥当性に関する確認をおこなっておきたい。

『ONE PIECE』には聖書からのさまざまなヒントが散見する<sup>6)</sup>。結論から言うと、『ONE PIECE』と『聖書』との関わりは「不即不離」の関係にある。『聖書』のシーン、登場人物、主要コンセプトを明らかに仄めかしつつ、構図を逆転させたり重点を変化させたりするなど極めて高次のパロディー意識の下で操作されていることが理解できる。

「不即不離」ということについていまま少し説明しておく必要があるとすればつまりは以下のようなことになろう。全体として確かにどことなく「下敷き」にしていることは理解できるが、完全に一致するわけではないという「曖昧さ」を残した類似。それは二つの要素に分けて考えることで正しく理解できる。

### ①名前・地名・物語展開等、固有名詞の一致が見られること

意味の逆転、男女の入れ替わり、名前がどこか似ているとか、あるいは名前が使われているだけなどさまざまな段階があるが、複数の名辞の一致は最低限の条件である。

### ②作品の中心または中心の一つである重要な事件や精神との共通性が認められること

これは非常に重要ではあるが、この②だけであれば説得力に欠けることになる。

①に関して言えば、ノア、マルコそしてソドム、ゴモラ。また巨人のサウロ、海賊のジーザス、スリラーパークのアブサロムなど確実に複数の名称が聖書から取られている。これらに関しては現在本稿と並行して執筆中の『ワンピース観光学』（仮題）（2013年 データハウス刊行予定）において詳述しているのでそれを参照されたい。そのほか、パーソロミュー・くまが登場の度に Bible を携えていることなどもインターネット上をにぎわしている話題の一つである。また、同じくネット上では命の様子を示すビブルカードを Bible と関連付けて読もうとする意見なども見られる。これらのことから、聖書を引き合いに出して『ONE PIECE』を考察することの妥当性に関しては疑いの余地は存在しない。さらには、ルフィの兄エースは「エス」に限りなく発音が近い。「エス」とは言うまでもなくイエスの別名である。そしてこれは本稿の主題として詳細に検討するが、この『ONE PIECE』の主人公ルフィの名も実は旧約聖書に収められている。

②に関しては、以下に詳述する『ルツ記』との関わりや、『ONE PIECE』に現れる伝説の海賊王ゴールド・ロジャーとバプテスマのヨハネとの類似、同じく登場人物の一人である「墓場のアブサロム」と『旧約聖書』に現れるアブサロムとの「関連」などにも注目すべきである。アブサロムに関しては一見、聖書の記述と強い影響関係を持たない。しかし、もう少し視野を拡げて観察すると、そのダビデやダビデの長男アムノン（アブサロムとは腹違いの兄弟に当たる）の特徴と近いものがある。また、これも前掲『ワンピースに学ぶ仕事術』において指摘したように、そもそもある革命的宣言

(メシア宣言⇔海賊王宣言) を行い続ける二人の若者(イエス⇔ルフィ)が、旅を続けながら重要な協力者(弟子⇔仲間)を獲得してゆくという『ONE PIECE』自体の構造が聖書に酷似しているともいえる。また、主人公ルフィは航海途中で関わる人々・島々の抱える問題に親身になって関わり、命を賭して解決してゆく。これは聖書に出てくる譬話である「よきサマリア人」<sup>7)</sup>と重ねて理解する以外、その根拠が見出せないほどに物語全体を貫く一貫した姿勢となっている。

これらのことから『聖書』と『ONE PIECE』との比較検討は極めて妥当であるといえる。

### 第3節 『ルツ記』の受容

「ルフィ」とは日本正教会における「ルツ」の呼称である。『ONE PIECE』を読む上で『ルツ記』と比べ読むことは、「ルフィ」と言う名前がルツのもうひとつの呼称である以上、必然性を有するとと言える。先にくこの『ONE PIECE』の主人公ルフィ彼自身の名も実は旧約聖書に収められている>と述べたのは、このことを指しての謂である。

『ルツ記』は旧約聖書に収められた短編の物語である。梗概を簡単に確認しておこう。

ある時ユダヤのベツレヘムの地に飢饉があり、エルメレクは家族と共に異教の地モアブへと避難した。しかしその地で夫エルメレクは亡くなり、妻のナオミと二人の息子が残される。その息子たちにそれぞれモアブの女性が嫁いだ。そのうちの一人がルツである。やがて二人の息子も死に、姑と二人の嫁が残った。そのうちにナオミは二人の嫁に自分の土地に戻るようにと言った<sup>8)</sup>。一人の嫁はそれを受け入れたがルツは姑についてベツレヘムへと戻る。そしてその地で、ボアズに見出されてルツは再婚し男児を産む。その家系から栄光のイスラエル王ダビデが現れることになる。

内村鑑三の「最初の聖書注解作であると共に、日本における最古の聖書注解書のひとつ」(山本泰次郎『内村鑑三聖書注解全集 第3巻』<sup>9)</sup>解説)である『貞操美談 ルツ記 一名、嫁と姑の福音』が見ているような、「虚飾なき貞操性<sup>10)</sup>」とでも称すべきルツの生き方そのものに対する評価である。夫に先立たれても姑にどこまでも同行する「嫁」としての態度を彼は絶賛するわけである。もちろんこのような読み方は、後のフェミニズム批評の時代に批判にさらされることになる。その多くが姑に対する嫁の自己犠牲的な態度に対するものである。しかし、これらに対してはK・D・サーケンフェルドの著書が「登場人物の愛他的な解釈は女性の全人性を損なうより、むしろ補強してくれるだろう<sup>11)</sup>」という明快な解答を用意してくれている。

また、その文学性に対しても評価は高く、例えばL・ライケン『聖書と文学』<sup>12)</sup>では『ルツ記』に関して次のように記述される。

ルツの物語は、「田園、牧羊、家庭生活の素朴で快い面を描く短篇詩、あるいは散文作品」としての牧歌という辞書の定義をもちいれば、牧歌的ロマンスである。その物語は女主人公をめぐる恋愛物語であり、その名をとってその巻の名称としている。ルツはなんといっても家庭的な女主人公である。彼女は二度結婚し、姑に仕え、物語の中心を占めるロマンスの貴婦人であり、ダビデにつらなる王家の血統の母であり、そして救い主の系図の一員である。この家庭的な主人公を宗教的女性英雄から切り離すことは不可能である。実際にはその家庭的な主人公は、宗教的な強靭さを見ずからの存在の拠り所としている。女性としての彼女の魅力の基礎は、その驚異的な美しさにあるとはどこにも語られておらず、むしろ性格の優しさと強さにある。神に仕えるという初期の彼女の選択に、ルツの宗教への傾倒専心が認められ、彼女をヘブライ人社会への同化に成功した旧約の歴史中数少ない外国人の一人としている。

最後の部分は、『ルツ記』のメッセージは、主人公ルツの個人的な生き方という枠を遥かに超える

ということを示している。彼女の一途な生き方は後の世代にまで「ある壮大な連鎖をなす<sup>13)</sup>」。非常にスケールの大きいイスラエルの物語全体へと影響し、やがてその系図の延長線上にイエス・キリストが連なり今日のキリスト教が誕生する。

『ルツ記』に関する言説から自然に「連鎖」というような言葉が漏れ出るのを見ると、『ONE PIECE』の読者は驚かざるを得ないだろう。『ONE PIECE』はまさに「ひとつなぎの大秘宝」（それがワンピースそのものである）を探す長大な旅の物語に他ならないからである。

#### 第4節 『ルツ記』のパロディとしての『ONE PIECE』

さて、『ONE PIECE』の主人公の名が冠された『旧約聖書』中の一部という前提で読み進める時、ある種「パロディ」（これは第2節でみたように「芸術観光学」における重要分析指標「MAPL」のうちの一つである）とでも呼び得る類似性、あるいは意識的な逆転を見ることが可能である。『ルツ記』と『ONE PIECE』との類似は以下の三点を挙げられる。いずれも左側は『ルツ記』、右側が『ONE PIECE』に登場する名称である。

- (1) ルツとルフィ
- (2) ナオミとナミ
- (3) エフラテとラフテル

(1) は自明の事実である。もっとも『ONE PIECE』のルフィが周知のごとく男性であるのに対し、元祖ルフィ（ルツ）は女性である。さらにはその「家系」は極めて重要で、ルツは異邦の民でありながらユダヤの正統の家系に関わり、イエスの系図へとつながってゆく存在である。「ルツ」の原義<sup>14)</sup>は明確ではないが、「善き友の意味」に解する向きもある。ルフィの家系は現在のところ祖父まで遡ることが可能である（祖父は海軍の重要人物、父は海軍に反旗を翻す革命軍に所属する）。

次に(2)「ナオミ<sup>15)</sup>」と「ナミ」であるが、『ONE PIECE』においてはルフィとナミを二本の柱として物語展開を読み進めることが可能である。一方、『ルツ記』においてルツ（ルフィ）にはマフロン（マロン）という夫が登場するが、物語展開上においては存在感は薄いものに留まっている。むしろルツと「対」に考えることができるのは姑のナオミである。ナオミはルツの夫の母親であって、彼女との関係がこの物語のひとつの核をなすと読むことができる。

表1 『ルツ記』『ONE PIECE』それぞれの「2本柱」的登場人物

『ルツ記』	ルツ（嫁）	-	ナオミ（姑）
『ONE PIECE』	ルフィ（船長）	-	ナミ（航海士）

つまり上記[表1]のような対比で語られてゆく。ルツ=ルフィであり、ナオミとナミとの音声上の包含関係あるいは類似は明白である。この点から、『ルツ記』と『ONE PIECE』に単なる名称の利用を超えた構造上の連関を想定することは牽強附会ではない。

最後に(3) エフラテとラフテル<sup>16)</sup>に関しては重視しておく必要があるだろう。カタカナ表記にした場合、どことなく雰囲気似ている、あるいは一文字違いという印象に留まる可能性もあるが、ローマ字表記にするとアナグラム風の類似状態を示す。ここでアナグラム「風」と表現したのは完全なアナグラムではなく、重複する文字が存在するためである。しかし、大切なのはアナグラムとして成立しているかどうかではなく、二つの「地名」の間にパロディ関係を類推する余地があるか否かである。どことなく雰囲気が似ている、あるいは一文字違いの並べ換えをさらに進めて「ローマ字表記の場合における対応」をも見出せることは、大いに相関関係を有する可能性を高くさせる(図1)。もし二つの地名の類似が作者によって意識的に操作されたものであるとすれば、同じくそこに込めら

れた意図の存在を類推することにも意味が生じてくる。もちろん、性別や関係性の変更といった方法を作者がとっていることから分かるように、エフラテとラフテルとを同じ意味を持つものと決めつけることは短絡であって、あるいは逆転、あるいは意識的無関係に留まる可能性もあることは当然意識しておく必要がある。

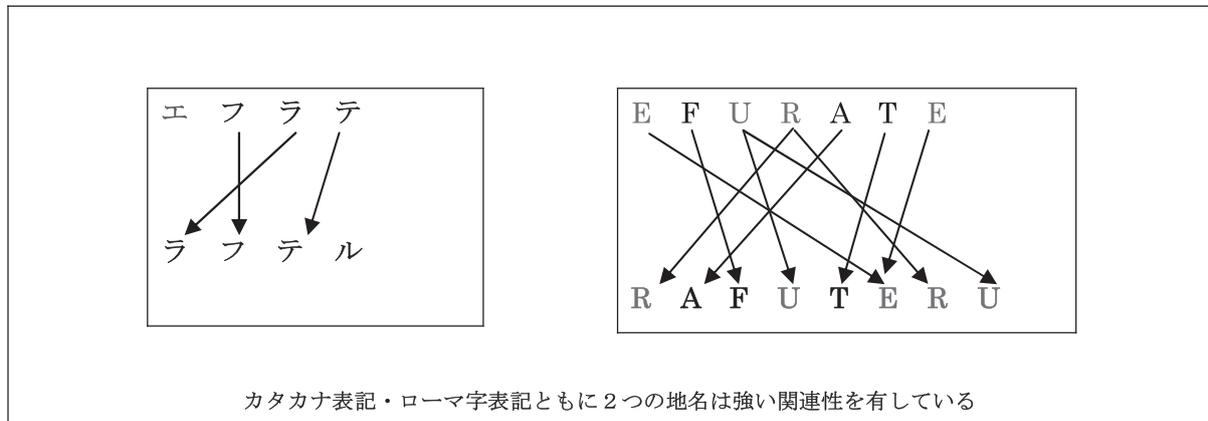


図1 エフラテ・ラフテルの相互関連

なお「性別の逆転」等の構造上の相違点を整理した上で、表2に示した。

- ①『ルツ記』から『ONE PIECE』へと＜移動＞する段階で、核となる二人の人物が同姓（女性）から異性同士へとスライドしていること
- ②激的な戦闘のシーンなどの存在しない静かな物語（『ルツ記』）から、「常在戦場」ともいえる激しい作品舞台（『ONE PIECE』）へと＜移動＞していること
- ③最終地へと向かう目的が、『ルツ記』においては姑ナオミへの責任及び親愛と老後の安定した生活、『ONE PIECE』においてはワンピースの発見であること

表2 『ルツ記』『ONE PIECE』類似要素対照表

	『ルツ記』	『ONE PIECE』
主要人物	ルツ - ナオミ	ルフィ - ナミ
2人の性別	女性同士	男女
2人の関係	嫁 - 姑	船長 - 航海士
物語の基点	夫の死去	海賊への憧れ
目指す場所	エフラテ	ラフテル
場所に向かう目的	責任、親愛、安定した生活	ワンピースの発見
場所の意味	キリスト生誕の地	海賊王の条件
主題の表層	安寧な老後生活・共同体	夢・仲間・冒険
主題の底流	キリストの系譜	Dの系譜

## 第5節 結論

本稿では「芸術観光学」の指標を確認した上で、その重要指標のParody（パロディ）の具体的な例として『ルツ記』と漫画『ONE PIECE』との比較考察を試みた。その結果、主人公の名称の読み替え、重要登場人物の名称の類似、目指すべき最終地点の名称の「捻り」。以上3点を確認した。これにより『ONE PIECE』が『ルツ記』のParody（パロディ）として成されている可能性が証明された。読者においては、進行中の超大作『ONE PIECE』を読み進めるための一つの指標を手に入れたということである。麦わらの一味が目指す地「ラフテル」が、『ルツ記』におけるような「再生の地」

「幸福の地」「後代への連鎖の始まり」となり得るかどうかは作者尾田栄一郎を含めた極小数の関係者の他は知る由もない<sup>17)</sup>。しかしある観光地を訪れる者が、ガイドブックを糸口として自分自身の場所を見つけ出すように、基準線を仮設する役割は果たすことができたと考えている。また本稿最初で述べたように、それが芸術観光学の一つの大きな役割でもある。

なお、本稿で検証した『ルツ記』以外の、『新旧約聖書』の『ONE PIECE』に対する影響に関しては近刊予定の『ワンピース観光学（仮題）』（データハウス刊）において詳細に論じているので参照されたい。

## 補注

- 1) 「芸術観光学」という新しい「観光学」の領域を摸索し、その方法および実践 ①「芸術観光学宣言」2008年3月平安女学院大学研究年報 8、②「観光都市のイメージ比較研究 残存記憶としての京都 — 村上春樹『ノルウェイの森』『国境の南、太陽の西』を中心として2010年3月 同年報10号、③「芸術観光学の意義と方法」2011年3月 同年報11号、④「映画の法則と観光の法則 芸術観光学基礎理論構築のために」2012年6月同年報11号
- 2) 「社会現象」といえるほどにまでその人気ぶりが注目されている漫画『ONE PIECE』最新巻68段階で、売り上げ総部数2億8000万部といわれる。
- 3) 「芸術作品に関連する形で形作られた観光地・観光現象」鳥取県境港市の水木しげるロードがその好例
- 4) 『ワンピースに学ぶ仕事術』2010年10月 データハウス刊
- 5) 『ONE PIECE STRONG WORDS』下巻 解説 内田樹 2011年3月 集英社刊
- 6) 聖書からのさまざまなヒントが散見する 例えば、次のような要素が聖書との間に共通点として見られる。  
①登場人物等の名前の一致 ②旧約聖書「ルツ記」と共通点 ③ゴールドロジャーとバプテスマのヨハネの先駆者の存在 ④増殖する使途と仲間と裏切り ⑤自己犠牲という主題（ゼフ、バルナール、シャンクス、ペル、エース、ボンクレー） ⑥通奏低音としての「よきサマリア人」
- 7) 「よきサマリア人」新約聖書『ルカによる福音書』第10章25節-37節参照
- 8) 自分の土地に戻るようにと言った「あなたがたは、それぞれ自分の母の家に帰りなさい。あなたがたが、なくなった者たちと私とにしてくれたように、主があなたがたに恵みを賜わり、あなたがたが、それぞれ夫の家で平和な暮らしができるように主がしてくださいますように」（『ルツ記』第1章8節-9節）
- 9) 『内村鑑三聖書注解全集 第3巻』1961年6月 教文館刊
- 10) 「虚飾なき貞操性」内村鑑三は同書で次のように『ルツ記』を絶賛する。<この記に載するところはわずかにユダヤ人民族の状態にとどまらざるなり。これを教理上より論ずれば、摂理に関する問題、嫁なるものがその舅姑に対する義務、信徒未信徒問題結婚問題、— ことに神愛神恵の不偏不党を教うるに至りては、おそらくは聖書中この記事のごとく最も明晰にして最も美妙なるはあらざるべし。その文に虚飾あるなく、その記事に隠蔽の痕跡だもなし。余輩これを疑わんとするもあたわざるなり。もしカーライルの言のごとく「歴史は実例をもって教うる哲学なり」とせば、ルツ記のごときは、僅々数千字の内に無量の深意を包含する哲学といわざるを得ず。その記事の明瞭淡白なる、最少量の常識を有する人もこれを解するを得べく、その教訓の深遠なる、もって国民の良心を刺激するに足る。無飾簡単に記載せられし事実にあたる戯曲のあるなし。天の高節貞操を導くその道は平易にしてなお奇跡のごとく、自然にしてなお詩歌のごとし。>
- 11) 「登場人物の愛他的な解釈は女性の全人性を損なうより、むしろ補強してくれるだろう」K・D・サーケンフェルド『現代聖書注解 ルツ記』（矢野和江訳2001年日本基督教団出版局刊）で、著者は、①犠牲あるいは他者への配慮は物語の中で男女を問わず行われている ②ルツがナオミについてゆくのはルツ自身の選択であること ③一人の人間が他者にコミットすることが自己実現の否定につながるわけではない ④そもそ

も「対男性」の問題ではなく、女性間の物語である ⑤他者とともに生きる「共生」という選択は、相手を守るだけでなく自己保存にもつながる等を根拠として、表記のように結論を下す。

- 12) L・ライケン『聖書と文学』山形和美他訳1990年すぐ書房刊
- 13) 「ある壮大な連鎖をなす」アディン・シュタインザルツ『聖書の人間像』(有馬七郎)で次のように評する。<ルツにおいて驚くべきことは、彼女が姑にただ付き添って離れなかったというだけでなく、異なった信仰と習慣を持った別の民族の女であるナオミに、自分の内面の生活の全てを合わせたということである。さらに、その生活は将来の見通しが立っていなかった。それでもルツは、ナオミに最後まで付き添うことに固執した。そしてその最後は、ルツ個人だけでなく、後に続く壮大な連鎖をなす世代にとっても、ある意味で、幸せなものであったが、この結末は、最初には分からなかったことである。連鎖の発端となった行動は、自由で、自発的なものであり、いかなる報償も期待してはいなかったのである。>
- 14) 「ルツ」の原義 内村鑑三は、『内村鑑三聖書注釈全集 第三巻』(註9)参照)において<「オルパ」は小鹿の謂、「ルツ」は「善き友」の意なり。共に婦人の名としては最も適当なるものなり。>としている。また、『キリスト教人名辞典』(1986年2月日本基督教団出版局刊)には<「水が豊かになる」という意か。>とあり、『The Encyclopedia of Religion』においても「friendship」の語と関わらせて説明される。『ONE PIECE』作者の尾田栄一郎がどこまでの情報を知った上でルフィという名を主人公に用いたかは現在のところ不明だが、「善き友」「水が豊かになる」のいずれもが若き海賊王ルフィの持つイメージを十分に膨らませてくれるものであると言える。
- 15) ナオミ 前掲の『内村鑑三聖書注釈全集第三巻』には、<「ナオミ」は「われの喜び」の意味なり。もって父母の愛児たりしを知るべし。>とある。これを「ナ(オ)ミ」と重ねる時、戦場で拾われた幼子のナミに対する名前としては皮肉なものを感じるが、一方でベルメールに可愛がられて育ち、ナミとノジコのためにベルメールが命を捨てる点などを考えると確かに「われの喜び」という名の変形も不思議ではない。また、戦場で捨てられたわけではなく、本当に可愛がられていたにも関わらず戦乱で行き場をなくしていたのかもしれない、など想像も膨らむ。そして、「ナ(オ)ミ」がルフィにとって決して離れることができない存在であるという最大の共通点を考えると、「われの喜び」を意とする「ナオミ」からのネーミングは最適なもののように感じられる。
- 16) ラフテル ワンピースという大秘宝が「偉大なる航路」の最終地点にあるラフテルという島にあることが具体的になるのは、巻十二-第105話に出てくる、クロッカスという男の証言が最初である。そこは歴史上にも、ロジャーの海賊団が確認しただけの伝説の島だという。
- 17) 作者尾田栄一郎を含めた極少数の関係者の他は知る由もない 「週刊 ONE PIECE 新聞」第4弾(日刊スポーツ新聞社 2012年12月13日号)のインタビュー中で作者の尾田栄一郎は「歴代の編集担当には、結末を伝えるのが“通過儀礼”だそうですね」という問いに対して「知っててもらわないと、何も話せないですからね」と答えている。

## The Old Testament Account of Ruth and *ONE PIECE* : Theory and Practice Art Sightseeing Study ⑤

HIRAI, Ken

*ONE PIECE* is one of the most popular series of comic books published in modern Japan and it also has become a social phenomenon. The names of characters that appear in the story come from various religions and tales, such as Norse mythology, Buddhist literature and the Bible, and the Bible in particular. Not only borrowing of character names but the author also uses them as the foundation of *ONE PIECE*. He has produced an original view of the world by the method of parody. In this paper, I inquire about the relationships between *ONE PIECE* and the Old Testament and the New Testament. By paying attention to the relationship of *ONE PIECE* to the account of Ruth in the Old Testament, I will try to clarify the strength of relationships between the two. I will also try to clarify the theme and the expressional features of the incomplete great work *ONE PIECE*.